

目 次

ページ

日本都市計画学会中国四国支部設立 20 周年記念シンポジウム	1
都市計画研究会 (都市 OS・スマートシティ)	4
共催事業 (GIS Day in 中国 2022)	5
会員紹介	6
今後の活動計画	7
編集後記	7



中国四国支部設立 20 周年記念シンポジウム

中国・四国地方の都市計画—これまでとこれから—

日時 : 2022 年 12 月 11 日 (日) 14:00~17:00

場所 : 合人社ウエンディひと・まちプラザ北棟 4 階
ギャラリーA

主催 : (公社) 日本都市計画学会 中国四国支部

参加者 : 61 名 (現地 38、オンライン 23)

2002 年に設立された中国四国支部の 20 周年を記念してシンポジウムを開催した。西名支部長による挨拶に続き、第一部は元支部長 2 名による講演、第二部は次代を担う研究者によるディスカッションを行った。

以降、講演及びディスカッションの要旨を掲載する。なお、紙面の制限により多くの部分を割愛したことについて登壇者の皆様には先にお詫び申し上げます。



西名支部長の挨拶及び会場の様子

第 1 部

特別講演 1 松波龍一氏 (元中国四国支部長)

「都市計画における理想と現実」

最近、自宅の裏側に石垣を積み、階段を作っている。自分でやると時間がかかるが、根気よくやるのが大事だと感じる。そして積み上げて、面白くなかったら、もう一度壊してやり直す勇気も必要だ。根気と勇気を持つと、少しずつ完成に近づくことが大きな収穫だった。

さて、話題は変わるが、信玄堤という。河川工学的な理想形であり、とても良いという人がいる一方、計画的な浸水地域を設けるといのは農地を考えると良くないという人もいる。理想と現実とは異なる。

旅行先で記憶に残っている場所として、地中海の田舎町の公園がある。プラタナスが等間隔に植えてあるだけの公園だが、周辺の映画館やレストランから人がしみ出してくる。また公園沿いに歩道は無く、公園内を歩かせている。このように、隣接地との境界線のデザインを一生懸命やっていることが面白い。こんな素晴らしい公園良く作ったと思う。

このような歩道と公園が一体的に処理されている例として、福岡市の出来町公園や呉市のアレイからすこじまがあったが、それぞれの市の人に聞くと狙って計画した確信犯ではないとのこと。残念だった。

札幌市のサッポロファクトリーと隣の公園は意識して公開空地と公園の一体化をしている。広島にも実例が

あり、京橋川右岸は公開空地と河岸緑地を一体化させた先進的な事例だろう。理想に燃えた人がいて、面倒なことも時間をかけてできた事例だが、それが一般解になっていない。公開空地と公園の一体化が普及していないのは広島としてはもったいないと思う。

アメリカやカナダで河川改修の現場や橋の欄干に掛けられている銘板を見たことがあるが、市長の名前等、様々な名前が刻まれている中、担当した建設会社やランドスケープアーキテクト、シティエンジニアの個人名が書いてある。名前が刻まれると半端なことはできない。携わる人が一生懸命やる環境をどう作るかによって、美しい景観ができるか決まる。公共的な仕事について名前を隠す傾向があるが、それで良い仕事ができるか。皆さんも自分の名前を消さないようにしてほしい。

いろんな跡地利用のプロジェクトに関わってきたが、理想論だけではうまくいかないということを学んだ。理想論だけでなく、現実論と周辺とのコミュニケーションがないとうまくいかない。普通の市民は一生懸命理想論を言うが、これはこれで大事なこと。一方で役所や企業はもっと現実なことをやらないといけぬ。理想を追い求めつつ、新しい現実を都市計画家が作らないといけぬ。

最後に一つだけ。環境デザインが壁に当たるのは、限られた土俵で勝負しようとしているから。公園の敷地の図面だけで描くのではなく、敷地の外側にも注意を向けて、公園と道路の境界等、境界のデザインを考える。そこで一生懸命働く人がいないと理想は実現しない。そういうことを考えながら、長年都市計画をやってきた。



松波氏

特別講演 2 高井広行氏 (元中国四国支部長)

「安心・安全のまちづくりを目指して」

今まで私が携わってきたことについてお話したい。私の指導教官の考え方は、いろんなことをやる中で自分の専門が出てくるという人であり、学位のための研究ではないという先生だったため、学生時代から様々な分野のことに関わった。

名古屋で生まれ大阪で育ち、大阪市立大学に進み、ロンドンの設計コンサルのインターン 3 カ月。その後、サ

ンフランシスコ市立大学への交換留学等も経験した。

昭和 53 年から広島に来て、最初の基礎研究としては住宅地区の評価をした。個別の評価指標をいかに総合評価に結び付けていくかという研究を続けてきた。特に交通環境と防災環境を取り上げ、物理的な要素と意識の側面の個別評価をして、それを集めて総合評価とした。

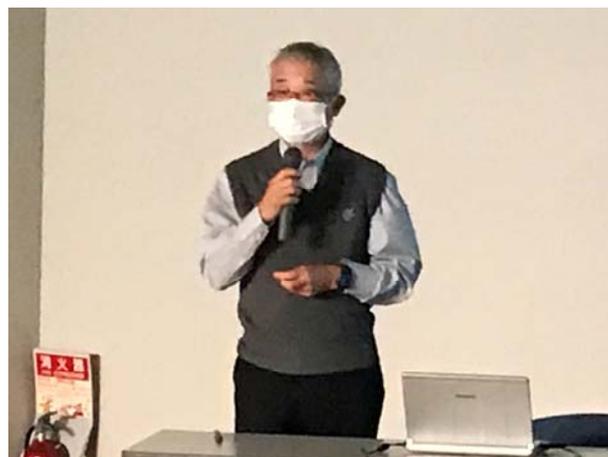
交通事故についても研究していた。昭和 45 年が第一次交通戦争で 16,000 人の死者数があり、平成 16 年には第二次交通戦争で死者数 11,000 人であったが、今は 3000 人くらいに減ってきている。その中の特徴としては、高齢者の免許保有率が高くなり、高齢者の事故も増えてきている。今まで被害者になっていた高齢者が加害者になってきている。地区の単位で交通事故をいかに減らすか、安全都市づくりの観点で研究を進めた。

防災に関する研究もしている。日本は地震がたくさん起こるが、地震の災害としては津波や火災がある。阪神大震災の特徴は大きな火災であり、風向や風速により延焼していく形が違うため、火災のデータを集め、データから延焼シミュレーションを行った。

阪神大震災の教訓としては、地震発生した 3 日以内と、その後の対応は異なる。3 日以内は人命救助が必要であり、その後、一般的な対応をするという前提で、安全な街をどう作るかを考えた。広島では豪雨災害も多く、都市計画学会でも報告書を作ったが、広島豪雨災害についても災害状況等をまとめた。

これからの高齢化問題への対応として、ハード面のバリアフリーだけでなく心のバリアフリーも求められる。少しずつ良くなってきているが、まだまだバリアフリーが進んでいない。また、10 年目になるが、熊野町で高齢者のためのバス「おでかけ号」の運行に関わっている。住民アンケートでは交通の便が悪いという意見が多いため、10 年後の生活体験を想像してもらうために 3 地域でワークショップを行い、その結果をもとにルートを作った。

その他、西条駅前広場の計画や LRT の計画、バスの運行実証等、中心市街地の活性化もやってきたが、今は家の庭の手入れや畑でイチゴやしいたけを作っている。時間が押しているようなので、この辺りで終わりにする。



高井氏

第 2 部 パネルディスカッション

「中国・四国地方の都市計画：これまでとこれから」

パネリスト：小林 剛士 (山口大学)

天野 佑介 (復建調査設計株式会社)

白柳 洋俊 (愛媛大学)

西内 裕晶 (高知工科大学)

コーディネーター：田中 貴宏 (広島大学)



(田中)

パネラーからの話題提供として、現在取り組まれている研究や活動の紹介と、中国・四国地方の都市計画の「これから」に向けて考えるべきことをお願いしたい。

(小林)

私からは、多様な価値観を許容する都市計画の枠組みについて話をしたい。平成 27 年度に山口県立地適正化計画研究会を設立し、支部の支援もあり、これまで 12 回開催してきた。立地適正化計画の区域指定、及び具体的な誘導手法について勉強しており、市街化区域に設定されているが、誘導から除外されているエリアにも着目している。

全米で一番住みたい街ポートランドの手法は、歩行者の回遊性を高め、買い物利用促進にも効果的であるが、再開発され、ジェントリフィケーションが進んだ結果、土地の価格高騰、家を失う人の発生、犯罪が多発、店舗の撤退等が起こっている。ポートランド市の計画の失敗ではなく、民間活力を誘導するまでは良かったが、それを調整することができていなかった。

宇部では、まちづくりワークショップを行い、街道沿いの古民家の改修を行っている。大学としては、デジタル技術を使って取組を支援している。地域の活動が増えてくると、それを計画に反映させることが必要となってくる。プロジェクトベースドプランニングとして、多様な活動を都市計画の将来の方針に合わせて選択し、支援していくことが重要になってくると考えている。

(天野)

私からは小さな拠点づくりの運営を考える会の取組を紹介したい。高齢化も進み、限界集落も増えている中国四国地方においては、支部でも先駆的に取り組んでいくべきテーマだと考えている。小さな拠点は中山間地域での生活拠点を集約していく拠点であり、全国的に増えているが、中国四国地方はあまり多くない。スタートしてまだ 2 年目であり、大きなことはできてないが、事例研究や見学会、シンポジウムを実施した。どういうことが拠点の形成に求められるのか、都市計画的な視点でど

ういう立地が良いのか、愛着を持って取り組んでもらえるのかを考えている。

今後は様々な技術革新や社会的変化が都市計画に及ぼす影響を考えていく必要がある。自動運転技術が進むと渋滞や事故が少なくなる。道路の余剰地が出る等、市街地の空間が余ってくるのではないかと。余剰地の活用、ファシリティマネジメントが求められる。

(白柳)

土木、景観が専門であり、肱川かわまちづくりの取組について紹介したい。かわまちづくりは河川整備メニューのひとつであり、肱川の河川環境を整備するもの。2018 年から始まり、肱川の歴史を学びながら、社会実験を通じて形にする作業を進めている。今のところ比較的うまく進んでおり、その最大の要因はプラットフォームづくりだと思う。活動が活発な地元住民が多く、行政や設計、大学が一つのテーブルで議論している。川のプレイヤーだけでなく、旅館、カフェなどの町のプレイヤーも積極的に参加してもらっている。

通常、河川区域だけを対象とした設計になるが、エリアの価値向上を考えながら全体の将来ビジョンを描くことに取り組んでいる。事業主体や管理区分の違いがあるが、エリアの価値を向上するために調整することが重要であり、民間の動きにも柔軟に対応していきたい。

(西内)

交通工学を研究している。今回は生活道路を話題にしたい。道路と言えば車が主役の空間となってしまっており、車に乗っている人から歩行者が怒られることがある。幹線道路も生活道路も、通学路のようなところも、車中心の空間になっている。

通学路だけでも車を排除し、車の通行機能をゼロにすることができないかと思っている。即効性のある取組として、AI を使って歩行者を自動で検知し、緯度経度の情報を使って通学中の子どもの行動を把握した。こども ITS と呼んでいる。登校時は 1 列で進んでいるが、下校時はワイワイ帰っている。この下校時くらいは車を排除して、子ども中心で歩いて欲しい。これからの道路計画は道路の持つ機能としてメリハリを作り、ソフト対策として機能のダウンサイジングを当たり前にしていきたい。こども ITS 技術を社会実装していきたい。

(田中)

4 人のパネラーの話題提供の他、会場からも活発な意見を頂いた。都市計画という分野が都市計画単体では存在できなくなりつつあり、デジタル技術を取り入れていけないといけない。外とのつながりの場を作っていくことが学会支部に求められている役割になるだろう。

また、公共と民間との関係をどう作っていくか。人口減少、ダウンサイジング等、中国四国地方で同じような課題を抱えている地域は多く、どういった方法で取組むか。横のネットワークが必要だと思う。

(文責：吉原 俊朗)

■ 第 2 回都市計画研究会 ■

今年度テーマ：デジタル技術と都市計画

今回テーマ：都市 OS・スマートシティ

日時：2023 年 1 月 22 日(日) 14:00~17:00

場所：オンライン

主催：(公社) 日本都市計画学会 中国四国支部

参加者：49 名

■はじめに

会の冒頭で、日本都市計画学会中国四国支部企画・研究委員会の田中貴宏委員長(広島大学)より、都市計画研究会の趣旨説明が行われた。本年度の都市計画研究会は、「デジタル技術と都市計画」というテーマで、若手委員が中心となり企画及び実施を行っている。今回は、「都市 OS・スマートシティ」というテーマの下、3名の講師による講演が行われた。

■第 1 部講演

○スマートシティにおける市民対話

尾崎 信(東京大学大学院 新領域創成科学研究科)

まず、尾崎氏が所属する「日立東大ラボ ハビタット・イノベーションプロジェクト」の研究テーマの一つである「スマートシティ実装における社会受容性」に関して、カナダ・トロントでのスマートシティプロジェクト「Sidewalk Toronto」における市民反対運動の経緯を、デスクリサーチにより時系列に整理した調査研究について紹介された。「データガバナンスに対する不安」「プロセスに対する不安」「マネタイズの方法論への不満・不安」といった問題が、「Google 社への不信」という背景の上で、相乗的に生じてしまったことが、市民運動につながった大きな要因ではないかと考察された。最後に、「市民対話のあり方」に関して、愛媛県松山市での「コロナ禍におけるデータ駆動型都市プランニング」の取組について紹介された。市民対話においては、オフラインの対話を確保した上で、オンラインの対話も連携的に進める「ハイブリッド型市民対話」が重要ではないかと考察された。質疑応答では、市民対話のプロセスやその方法、オンラインとオフラインの使い分けなどについてディスカッションがなされた。

■第 2 部講演

○「三方良し」をかなえる共助型スマートシティを目指した取組

柏木 康豪(会津若松市 企画政策部 企画調整課 スマートシティ推進室)

まず、会津若松市のデジタル技術を活用した取組事例として、「MaaS プロジェクト」「エネルギーの地産地消」「スマート農業」「食・農業の需給ダイレクトマッチング」「位置情報を活用した防災サービス」「子どもに関する情報の一元化」「デジタル地域通貨の活用による健康促進」「介護現場における新しい支援サービス」「ICT オ

フィス『AiCT』など、実証段階の取組も含め、様々な分野における取組が紹介された。次に、スマートシティ推進の背景や経緯、根本的な考え方、取組を推進する上での共通ルールなどについて説明が行われた。最後に、今後目指している新たなスマートシティ推進の枠組みや、市民参画の促進に向けた取組について紹介された。質疑応答では、市民参画の促進策や分野横断的な取組、市民の行動変容に向けた工夫などについてディスカッションがなされた。

○加古川市のスマートシティプロジェクトについて

多田 功(加古川市 企画部 政策企画課 スマートシティ推進担当)

まず、加古川市が独自に実施してきた取組「見守りカメラ」の説明が行われ、設置背景や設置に至るまでの経緯、運用状況や取組の効果などについて紹介された。次に、デジタル時代における都市 OS やデジタルトランスフォーメーションの意義・必要性、データ利活用基盤サービス「FIWARE」の概要などについて紹介された。次に、市民参加型合意形成プラットフォームとして、国内で初めて導入された「Decidim」について、「加古川市スマートシティ構想策定」「かわまちづくり」「施設の愛称決定」「高校生による地域課題への取組」などにおける活用事例について紹介された。また、地デジ波を用いた災害情報伝達手段の導入、API 連携によるデータ活用、3D 都市モデルの活用、Liveable Well-Being City 指標の活用などについて紹介があった。最後に、加古川市が目指す都市像の実現に向けて、スマートシティ推進の取組がどのように位置付けられているのか、また、今後の中長期的な方向性などについて説明が行われた。質疑応答では、見守りカメラ設置による副次的なメリットや、スマートシティ推進を取り組む上での考え方などについてディスカッションがなされた。

■おわりに

会の終わりに、都市計画研究会の運営メンバーである、日本都市計画学会中国四国支部企画・研究委員会の横山真委員(福山市立大学)より会の総括が行われた。



当日の様子

(文責：金井 れもん)

■ GIS Day in 中国 2022 ■

日時：2022 年 12 月 8 日(木) 13:00~17:05

場所：広島大学・東広島キャンパス

主催：「GIS Day in 中国 2022」実行委員会
(広島大学都市・建築計画学研究室内)

共催：広島大学 情報メディア教育研究センター
広島大学 防災・減災研究センター 他

後援：日本都市計画学会中国四国支部
日本建築学会中国支部、日本地理学会、
熊野町、東広島市 他

協賛：(株)エム、ESRI ジャパン(株)、
(株)エネルギー・コミュニケーションズ、
(株)ジェクト、中電技術コンサルタント(株)、
(株)ニュージャパンレッジ、(株)パスコ

参加者：84 名(第 1 部)、29 名(第 2 部)

「GIS Day」とは、GIS の理解と利用促進、地域の GIS コミュニティの創出・拡大を目的として、米国で開始された世界的な草の根運動であり、現在、世界中で、この「GIS Day」が開催されている。中国地方では、2013 年より広島大学で「GIS Day in 中国」が開催されており、今回で 10 回目を迎えた(毎回、日本都市計画学会中国四国支部が後援)。2020 年、2021 年は COVID-19 の影響により、オンライン開催であったが、今回は久しぶりに広島大学にて「GIS Day in 中国 2022」が開催された。

■はじめに

「GIS Day in 中国 2022」は第 1 部(講演会)と第 2 部(GIS 体験講習)に分かれており、第 1 部は昨年度、広島大学内にオープンしたミライクリエの多目的ホール、第 2 部はキャンパス内の端末室で開催された。

■第 1 部：講演会 (13:00~15:15)

第 1 部に先立ち、主催者を代表して、「GIS Day in 中国 2022」実行委員会委員長の田中貴宏(広島大学)より挨拶があり、その後、講演等が行われた。

□講演：「災害時における道路網の性能及び利用者ニーズの可視化・定量化」カ石真(広島大学 大学院先進理工系科学研究科)

平成 30 年 7 月豪雨をきっかけに、研究室で進めている研究について、説明をしていただいた。特に、災害時には交通の「供給」と「需要」が大きく平常時と変わるため、この「供給」に関わる研究(道路網上の脆弱なリンクの抽出)と、「需要」に関わる研究(災害時の交通需要の変化の抽出)を進めているとの話があり、それぞれの内容について詳しく説明をいただいた。

□事例発表：「広島県が進める建設 DX『DoboX』の紹介—広島デジフラ構想に掲げる取組—」岡崎太一(広島県土木建築局 DX 担当 主査)

広島県が掲げている「広島デジフラ構想」の一環として整備を進めている、インフラマネジメント基盤(DoboX)について、説明をいただいた。実際にシステ

ムを使ったデモを通して、DoboX の活用事例の紹介も行っていた。

□最新技術報告：「ArcGIS Pro の紹介」大津留麻代(ESRI ジャパン株式会社)

米国の ESRI 社(Environmental Systems Research Institute Inc.)が開発した、「ArcGIS Pro」の新技術(3D 機能、クラウド機能、ディープラーニング機能等)について報告をいただいた。

□学生報告：「山中の森林に潜む活断層地形調査の DX—地形と地層断面の三次元詳細データ取得—」森渉・山中蛍(広島大学 大学院人間社会科学部)

航空レーザ測量と地上レーザ測量を用いることで、従来の空中写真による地形判読では発見が困難であった山中の森林下の活断層地形を発見できるようになったこと等について、研究報告をしていただいた。

□生徒報告：「海洋ごみ問題の解決に向けての『シチズンサイエンス』からの挑戦—シビックテックを活用した市民協働意識の醸成に向けて—」津和梨々乃・細川和愛・斎藤詩(山陽学園中学校・高等学校)

シビックテック(市民自身(Civic)が技術(Tech)を活用して、社会課題を解決する取り組み)のひとつとして、スマホアプリを開発し、それを実際に市民の方々に使っていただき、海洋ごみ問題の解決を図るという実践活動について説明していただいた。

■第 2 部：GIS 体験講習会 (15:30~17:05)

第 2 部は、端末室に場所を移し、受講者 1 人が 1 台の PC をそれぞれ使用する形で、GIS 体験講習会を行った。講習では、協賛企業である ESRI ジャパン株式会社のご厚意により、ArcGIS Pro のライセンスを貸与いただいた。

■おわりに

久々の現地開催となったが、結果としては、多くの方にご参加いただくことができ、盛況であった。また会場では、至る所で GIS 談義が行われており、現地開催の重要性を改めて感じた。様々な社会課題解決に向け、地域の GIS コミュニティの和を広げていくという役割を担う、この「GIS Day in 中国」を今後も続けていきたい。

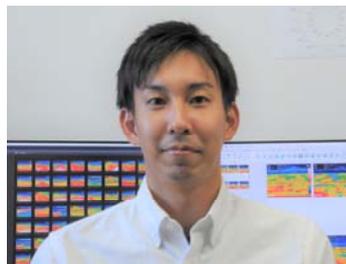
(文責：田中 貴宏)



会場の様子(第 1 部)

■ 会員紹介 ■

横山 真 福山市立大学 都市経営学部 講師



■ 略歴

1991 年生まれ

山口県山口市出身

2014 年 広島大学工学部第四類 (建設・環境系) 卒業

2016 年 広島大学大学院工学研究科博士課程前期 修了

2019 年 広島大学大学院工学研究科博士課程後期 修了

2016-19 年 日本学術振興会特別研究員 DC1

2019-21 年 福山市立大学都市経営学部 助教

2021-現在 福山市立大学都市経営学部 講師

■ 自己紹介

私は小学校入学までは香川県三木町で、それ以降は山口県山口市で過ごし、瀬戸内地域で育ってきました。子供の頃は地球環境問題に興味があったのですが、次第により身近な都市に興味が移っていき、2010 年には広島大学工学部第四類 (建設・環境系) に入学しました。2 年生からのコース分けで、建築と土木のどちらから都市にアプローチしようか悩みながらも最終的に建築の道を選択し、研究室配属後は建築環境学研究室と都市・建築計画学研究室にて、博士課程の修了まで田中貴宏先生にご指導いただきました。最初の研究テーマは、神奈川県都市的土地利用を集約した際の都市気候をシミュレーションするという環境工学と都市計画にまたがる研究で、研究を進めるのは大変でしたが、幅広く物事を扱うことに面白さを感じ、それ以降も中間領域に位置する研究を続けています。

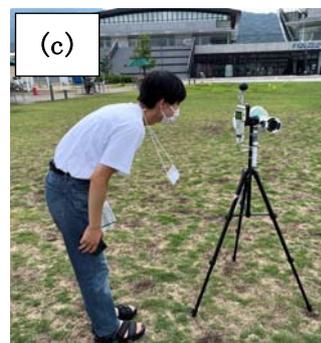
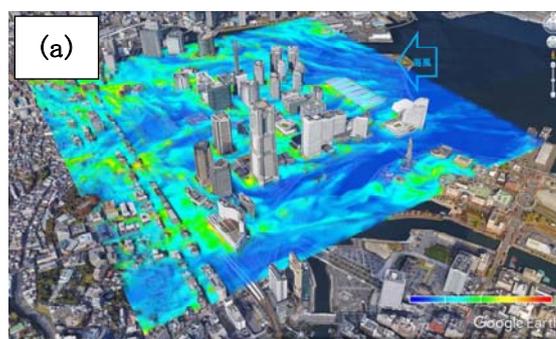
また現在の職場である福山市立大学都市経営学部は文理融合型の学部で、学際的な視点に基づいて現代の都市社会が抱える課題を解決していくこと目指しています。私はその中の環境系というグループに所属し、「都市社会のデータ解析」、「GIS 演習」、「統計の世界」等、データ分析の手法について主に教えています。多様な学問分野を背景とする先生達と話していると、アプローチこそ違えども現代社会に対して持っている問題意識に関しては共通する点も多く、新しいことに次々と気づける日々はとても刺激的です。一方、多様な視点を取りまとめていくことは非常に難しく、都市経営学部でも現在その課題に直面していますが、その柱の 1 つに都市計画やまちづくりの分野が位置づけられるのではないかと大きな可能性を感じています。

■ 研究紹介

これまで地球温暖化と都市ヒートアイランドに伴う都市高温化を主な問題意識としてきました。またこれらの現状分析や将来予測に加え、分析結果を踏まえた土地利用や都市形態のあり方を明らかにすることを念頭に置いています。博士課程以降は、どのようなエリアにどのような都市高温化緩和策を用いれば良いか? を都市づくりの現場に伝えるツール作成を目指し研究を進めています。

具体的には、実測調査や数値シミュレーションを駆使して、都市の気候環境を時空間的に捉えます。例えば、日本の都市の多くは沿岸に位置し日中に海風が吹くため、これを活用して都市を冷やすことが望まれます。またその吹き方は都市や地形により異なるため、都市毎に調査を行い、空間解析や統計解析を用いてそれらの傾向や要因を明らかにしていきます。これまで横浜市、広島市、福山市等を対象に、都市気候のゾーニングマップ等を作成してきました。また都市内部の空気の流れは非常に複雑になります。これを数値シミュレーションで再現するには大きな計算能力が必要なため、広範囲を対象とする場合には、スーパーコンピュータである地球シミュレータを用いています。その結果の一例として、横浜みなどみらい 21 地区における地上付近の気温分布を 3 次元で示しています (図 a)。図右側の東京湾から吹く海風が気温変化しながら進入していく様子が再現されています。

福山市立大学に着任してからは、OPEN STREET FUKUYAMA で日陰施設を実験的に設置したり、公園のビジョン作成に向けた現状調査を行ったり等、地域と連携した実践に近い研究にも取り組んでいます (図 b, c)。このような研究や実践を今後も展開していければと考えておりますので、日本都市計画学会中国四国支部の皆様には、引き続きご助言やご協力をいただけますと幸いです。今後とも、何卒よろしくお願い申し上げます。



■ 今後の活動計画 ■

■ 2023 年度 (第 21 回) 支部通常総会・研究発表会

日時：2023 年 4 月 8 日 (土) 9:45～17:00 (予定)

会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ

北棟 6 階 マルチメディアスタジオ

(〒730-0036 広島市中区袋町 6-36)

■ 編集後記 ■

2020 年より猛威を振るっていた新型コロナウイルスの影響も徐々に陰りが見え始め、生活上の不自由な制限も少なくなってきました。海外旅行に行く人・来る人が増えたり、スポーツでは声出し応援が可能となるなど、かつての日常が戻りつつあります。「コロナが明けたら…」という社交辞令も使えなくなってきました。

今年度からニューズレター編集委員の体制が大きく変わり、この編集後記もメンバーにて交代で執筆することとなりました。しかし、情報発信を苦手とする私は、いざ書こうと思ってもなかなか筆が進まず、普段から SNS などで情報を発信する力をつけておかないといけないなあ…と痛感したところです。

先輩方はこれまでどのようなことを書かれていたのだろうと過去のニューズレターを読み漁っているうちに、どこか遠方の町に行った際に感じたことを写真付きで報告すれば紙面も埋めやすいのでは、ということに気づきました。しかし、最近行ったところを思い返してみても、コロナのせいもあり遠出した記憶はほとんどありません。であれば、近場の紹介でもいいかと、とふと思いついたのが、つい先日、2 月の頭に訪れた「おりづるタワー」です。

おりづるタワーは広島市中区大手町という中心部にありますが、オープンして 6 年以上が経過しているにも関わらず、これまで行ったことがありませんでした。14 階建てのビルで、広島市内が一望できる展望デッキや、最先端の技術を体験したり、広島を学ぶことができるフロアもあります。

最上階の展望デッキに上ると、原爆ドームや平和記念資料館など、本やテレビなどで見たことがある「これぞ広島」といった景色が広がっていました。原爆ドームは下から見たことはあったものの、上から見るとまた違った雰囲気を感じ取ることができます。また、まちを上から見ることで、かつて丹下健三氏が提唱した「平和の軸線」が目に見えてはっきりと分かり、普段下から見ても分からなかったまちの様子や歴史を再確認するよい機会となりました。ほかにも、建設工事中の旧市民球場跡地、サッカースタジアムなど、これから変わりゆく広島の様子を間近で感じることができました。今しか見れない光景が広がっていますので、広島を訪れた際にはぜひ立ち寄ってみてください。



タワーより北側を望む (市民球場跡地・中央公園)



タワーより南側を望む (原爆ドーム・平和記念資料館)

現在、広島市の中心部は、ハード・ソフトの両面から急速に変わりつつあります。個人的には、いちサッカーファンとしてサッカースタジアムの完成が待ち遠しいところですが、スタジアムや旧市民球場跡地など、中心部エリアの一体的なまちづくりによって、新たな賑わいが生まれることに期待が膨らむばかりです。

次号の配信は令和 5 年 5 月の予定です。ホットコーナーやコラム、トピックス関係など、学会員の皆様からの原稿をお待ちしております。

何かございましたら、中国四国支部事務局(総務委員長)田中貴宏(e-mail: cpj.chugokushikoku@gmail.com)

までご連絡いただければ幸いです。

(文責：織田 恭平)

編集委員：吉原俊朗 (編集長)、天野佑介、織田恭平、北本拓也、田中健太、田辺博樹、福馬晶子、松田智仁、山下和也

※当編集委員は、総務委員会の要請により参加したメンバーです。ご参加いただける方は、編集長にお申し出下さい。